

第108回 Mountain World

北米登攀のレジェンド フレッド・ベッキー

池田常道

北米のクライミングに興味を持つ人ならだれでも、フレッド・ベッキーの名を聞いたことがあるだろう。70年以上にわたって倦むことなく登り続け、ワシントン州のノース・カスケード山脈を初めとしてカリフォルニア、オレゴン、ワイオミング、アリゾナの各州に足跡を記し、アラスカやカナダでも多くの初登攀を成し遂げた。年間40から50のピークに登り、生涯に記録した初登頂・初登攀は合計1000近くに及ぶ。非公式ではあるが、その数はおそらく世界一であろう。70代を越えてからはさすがに活動も鈍り、晩年はシアトルで過ごすことが多かった。最近は心臓を病んでホスピスに入っていたが、入院4日目の10月30日に94歳でこの世を去った。葬儀は11月4日、レヴンワース郊外のマウンテンビュー墓地で執り行われた。

ベッキーが生まれたのは1923年の1月、ドイツのデュッセルドルフのことだった。父は内科医、母はオペラ歌手。フレッドはその長男、ウォルフガング・ゴットフリードである。2年後には弟のヘルムートも生まれた。第一次大戦の敗戦国となったドイツの不穏な情勢を見限った両親は1925年、一家でアメリカ北西部のシアトルに移住、ファーストネームも英語流にフレッドと称した。

時にベッキー13歳。ボーイスカウトでクライミングを始め、3年後にシアトル・クライミングクラブの会員となった。この年早くも、ノース・カスケードのマウント・デスペイで生涯最初の初登攀を記録した。3年後にはカナダ・コースト山脈のウォディントン(4019 m)第2登に成功。パートナーはヘルムート(愛称ヘルミー)だった。6年前にフリッツ・ヴィースナーがウィリアム・ハウスと登った困難なピークを、19歳と17歳の兄弟が再登したことは評判を呼んだ。

4年後にはアラスカ南東部に行き、ボブ・クレイグ、クリフォード・シュミトケとデヴィルズ・サム東稜を初登攀。このほか1945年にマウント・シュクサン、47年にリバティ・ベル北峰、48年にマウント・ベイカー北峰と、ノース・カスケードの山々で「初」を積み上げていった。

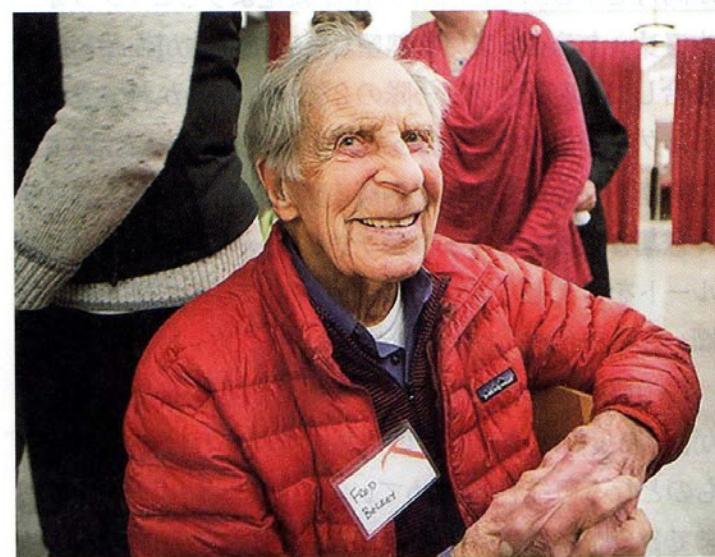
ワシントン大学経営学科を卒業したのは1949年、

26歳のときだった。しかし定職には就かず、クライミングバムの生活を選んだ。山への愛が勝ったか、生涯妻を娶らなかった。この年、最初の著書『カスケード・アルパインガイド』シリーズ3巻を上梓、以後多くのガイドブックを執筆した。『北アメリカの山々』、『氷河の山脈』、『マッキンリー：氷の玉座』、『ノース・カスケードへの挑戦』等々である。また、『アメリカン・アルパインジャーナル』に寄稿した本文記事は22本に及び、その数倍にあたる登攀リポートも寄せた。

1954年には、ドン・マクリーンらとマッキンリー北峰北バットレスを初登攀。ハインリヒ・ハラー、ヘンリー・メイボームとデボラに初登頂、同じメンバーでハンター西稜を初登攀している。

後年、キリマンジャロやモンテローザに登っているが、ヒマラヤの高峰登山にはただ1回しか参加していないため、ベッキーの名は日本人になじみが薄い。それは1955年、当時未踏の巨峰ローツェ(8516 m)を試みたときのことだった。ノーマン・ディーレンファースが編成した国際隊に、オーストリアから2人、イススから2人、アメリカからはベッキーとリチャード・マクゴワン、ジョージ・ベルの3人が参加した。エルнст・ゼン(オーストリア)の単独攻撃が失敗に終わったらあと、ベッキーはブルーノ・シュピーリヒ(イスス)と5人のシェルパを伴って4回目の攻撃をかけたが、後者が雪盲になり、病人を助け下ろすのに残る物資と勢力を使い果たしてしまった。

なおベッキーは後年、新たに開かれた中国の山にも興味を示し、82年11月にアメリカ隊を率いて四川省の嘉子峰(6540 m)に初登頂している。



晩年のフレッド・ベッキー。The Mountaineers